

MARIO GIACOMELLI

白、それは虚無。黒、それは傷痕。
きず あと。



「黒」と「白」とを見事に操り
強烈なハイ・コントラストで
「死」と「生」に立ち向かった
マリオ・ジャコメリ。
二〇〇八年、一四〇余点による
本邦初の回顧展は、大きな反響を呼び
数多くの来場者が訪れた。
今回は「ホスピス」「スカンノ」「神学生たち」
「大地」などの代表作はもとより
前回紹介されなかった8シリーズ
中でも最も詩的なシリーズ
「シルヴィアヘ」を加え
作品数を二一八点と大幅に増やし
作家の本質へ切り込む展覧会となる。



THE BLACK IS WAITING FOR THE WHITE

2013年3月23日[土]—5月12日[日] 東京都写真美術館

10:00—18:00(木・金は20:00まで、入館は閉館の30分前) 毎週月曜日休館(月曜日が祝日の場合は開館し、翌火曜日休館、ただし4月30日[火]は開館)

マリオ・ジャコメリ写真展

2013.3.23 Sat.—5.12 Sun. Tokyo Metropolitan Museum of Photography

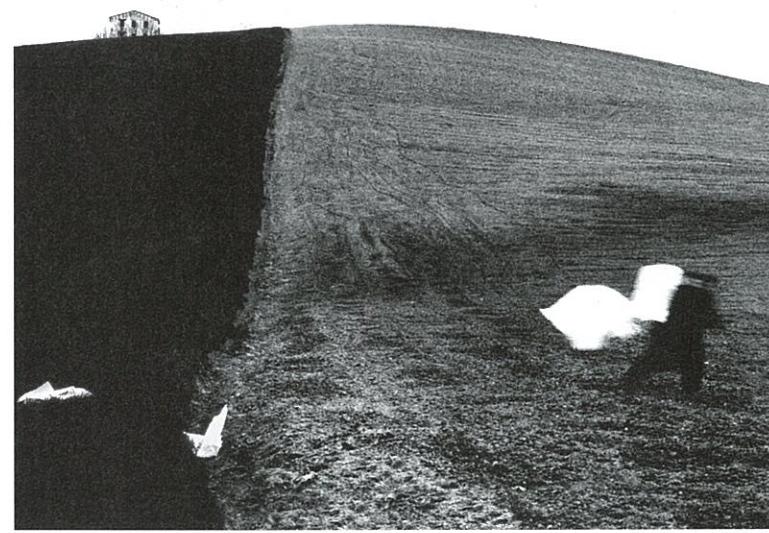
写真は19世紀という化学の時代に生まれ、
20世紀の化学と物理の並立時代を経て、
物理が席巻する21世紀まで来た。
その時、マリオは
この世紀の到来を嫌うかのように
逝ってしまった。



Mario Giacomelli ©Guido Harari/Contrasto



「スカンノ」より



「自然についての認識」より



「ルルド」より

MARIO GIACOMELLI

マリオ・ジャコメリ

アレッサン德拉・マウロ(本展覧会キュレーター FORMAアーティスティックディレクター)

20世紀ヨーロッパの申し子、マリオ・ジャコメリは、1920年代にイタリアのマルケ州、アドリア海に面した町セニガッリアに生まれた。アドリア海には、幻想的な物語の語り手を生み出す力があるのかもしれない。時代を経ても世界中で称賛される物語の創造者、フェデリコ・フェリーニもアドリア海のほとりで生まれている。生家は貧しく、ジャコメリは幼くして父を失いトラウマを負うことになる。2人の弟があり、幼少時から、町のホスピスの洗濯婦だった母の仕事場出入りしていた。人生の終末の残酷な光景、抗えぬ老いを目の前に彼の性格が形成されていく。これが彼の美に対する感性の将来を予兆させるものとなった。

ジャコメリは若くして印刷の仕事につく。経済的な理由もあるが、自身の選択であり、生涯この仕事を続けることになる。名刺やレターへッドなどの印刷を通じて、活字で白地に記される黒、光と影が明瞭に描く様に慣れ親しんでいった。1950年代、写真が彼の生活に飛び込んでくる。偶々の出会いにも関わらず、生活を大きく変えることになる。創造への意欲をすべて吸収し、強烈な知的活力のさまざまな経験、発言、隠喩をそこに注ぎ込む。それは凡庸とは逆の、まれにみる独創になった。

印刷所の仕事の傍ら、日曜日にはカメラを手に近隣の丘陵地帯を歩き回り、夜は現像に時間を費やした。

ジャコメリの作品は、驚くほどに多様な写真だが、多くはある着想を強い核として構成された連作となっている。彼自身が夜間に暗室で長い時間かけて現像したプリントは、トリミングや覆い焼き、多重焼き付けなどの試行錯誤の成果である。一枚一枚のプリントに現れた明瞭なライン、根源的な感情、突き詰められた思いの中に、たぐいまれな一貫性と詩情、幻想的な力が看取できる。

最初の写真作品として知られるのは、形態的に申し分のない静物

と、母や妻の肖像だが、既にそこにはたぐいまれな観察力が見られる。また風景写真は、最大の分量を占める。多くの丘陵の写真は、登ったその頂から、または軽飛行機から撮影された。大地とそこに刻まれた畝の描く線の中に人間存在の証を捉えようと生涯し続けた。人生経験の何よりも証明、労苦の印をそこに見ている。

ホスピスにも、成人してから再びカメラを手に戻ることになる。盾のようにカメラを構え、幼少期の亡靈たちに形を与え、苦悩や孤独、老人たちの動作を記録し、その光景を更に心に強く訴えるものにしている。

とりわけ苦悩は、彼が決して避けて通らなかった感情であり、むしろ積極的に求め、写真の中で昇華させようとしている。それは

例えば「ルルド」にみられる。治癒を願う病人たちの行列は、叶わぬ希望の悲しい証である。

神学生達が雪の中、陽気で無邪気にマントを翻しているあの有名なシルエットも同様だ。単純で儂く陽気な動きは、苦悩の裏の顔だから。苦悩は直接表現されてはいないが、はっきりと知覚できる。動き回る彼らを見る私たちは、踊りがいかに儂いものかを知っている。

ジャコメリは、「プーリア」「善き土地」の連作に見られるように、農夫たちのリズムにも強く惹かれ、農業の中に過去への回帰を求めていく。しかしその過去は彼が実際属したものではない。同じように「スカンノ」では、アブルッツォ州の山間の町スカンノの通りに、昔日のリズムを、自分の追憶の村のリズムを見つけようとする。

ジャコメリの活動は、2000年11月の死まで続けられる。新世纪に届きたくない、自分に適した20世紀に留まりたいともいうような最期だった。

前記した作品の他に、有名な詩を写真に移し替えたものがある。レオパルディの詩に触発された「シルヴィアへ」、エミリー・ディキ

ンソンの詩による「私は何者でもない」がそれだ。詩句こそが、形あるものを作り出していくための濃密で強力な核になっていたことが、これらからも分かる。さらに、「ホスピス」や「神学生たち」といった有名な連作の中に、彼自身が詩のタイトルをつけて呼んだものもある(前者はチエーザレ・パヴェーゼの「死がやって来ておまえの目を奪うだろう」、後者はダヴィッド・マリア・トゥロルドの「私には顔を撫でてくれる手がない」)。詩句と写真がまるで呼応しているようだ。

ジャコメリの写真は世代を超えて写真家たちに影響を与えた。モノクロの強いコントラスト、苦悩を詩的に奥深く普遍的なものにする力にうたれ、そこに写真を追及する意味を見出す。ジャコメリは、国際的にみても最も独創的な作家の一人であり、死後10年を経た今でも、新たな側面、新たな連作、新たな写真などの貴重な遺産が彼のアーカイブから発掘されている。

今回の展覧会では、彼の最も有名な連作(「ホスピス」「スカンノ」「神学生たち」「ルルド」)を、ジャコメリ自身が望んだ形で展示する。それだけではない。未紹介の抽象的な写真群が展示されるが、これらはいわばジャコメリの創作活動の源泉「貯蔵庫」のようなもので、非常に魅力的かつきわめて個人的な作品と言える。

全体が一つの詩であるかのように、ジャコメリの写真たちは見る者の中をめぐる。すべての写真が、大地の質感で練られ、白と黒の痛いようなコントラストを持ち、過去の経験の癒えざる傷口をつきつける。暗室で時間をかけ、綿密な作業で作り上げた質感は、まるで手で触れることができるようだ。それが多様なテーマや対象、印画紙上のさまざまな形態を通じて、人間存在というものをユニークな有り様で確実に伝えてくるのだ。

THE BLACK IS WAITING FOR THE WHITE

©Archivio Mario Giacomelli - Senigallia 表紙「神学生たち」より 裏表紙「スカンノ」より

2013年3月23日[土]—5月12日[日]

10:00—18:00(木・金は20:00まで、入館は閉館の30分前)

毎週月曜日休館

(月曜日が祝日の場合は開館し、翌火曜日休館、ただし4月30日[火]は開館)

入場料 一般 1,000(800)円/学生 800(640)円
中高生・65歳以上 600(480)円

*()は20名以上の団体および東京都写真美術館友の会会員

*小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料

*第3水曜日は65歳以上無料



<http://www.parco-art.com/giacomelli>



主催 青幻舎、NADiff、PARCO
共催 東京都写真美術館

後援 イタリア大使館、イタリア文化会館

お問い合わせ 東京都写真美術館
Tel.03-3280-0099 www.syabi.com/

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
JR恵比寿駅東口より徒歩約7分(動く通路使用)
東京メトロ日比谷線 恵比寿駅より徒歩約10分

当館には専用駐車場はありません
お車でご来館の際は近隣の有料駐車場をご利用ください

